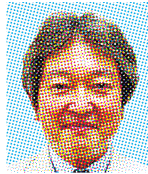


りんだん 佐賀



朝長 修さん

ともながクリニック院長

ともなが・おさむ 1960年生まれ。嬉野市(旧嬉野町)出身。鹿島高一長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター(新宿区)を開設。東京女子医科大糖尿病センター非常勤講師。東京都。

私が専門とする糖尿病は国民病と称してもいいくらい患者さんの数が増えている話はしましたが、1型と2型があることはご存じでしょうか? いわゆる生活習慣病としての糖尿病は2型で、我が国の糖尿病患者さんの95%以上を占めています。

一方、1型は10万人に1〜2人くらいの発症率で、極めてまれな病気です。典型的な1型は小児期に、何らかの免疫の異常が起り、間違つて自分のインスリンを分泌する細胞を攻撃してしまいます。突然、著しい高血糖が起り、体重減少、口渇、多飲が出現します。すぐにインスリンを打つことが必要です。間もなく、インスリンの自己分泌能は枯渇し、終生にわたるインスリン療法を余儀なくされます。ただしインスリンを適正に打てば、ほぼ普通の人生を送ることができます。1型糖尿病はイン

ご存じですか? 1型糖尿病

特別視せず 普通に接して

スリンが出ないことを除いては健常人と同じ、目が悪いから眼鏡かけているのと同じようなものです。勉強して医者になった人、プロスポーツで活躍する人もたくさんいます。もちろん結婚、妊娠、出産も可能です。基本的に治療中、進化した合併症に至ることはごくまれです。

「子どものくせになんぞいなく病になつたんだ?」「体育はやっちゃダメ」「給食の前に教室でインスリン打つのは困る」なんて

管理しています。ほとんどの患者さんは子どもの頃からインスリンを打っている、仕事の内容や食事に合わせてインスリンを自己調整することが上手です。

ある日、発症間もない1型糖尿病の女子高生に付き添いでいらしたお母さんがとても不安そうな様子でした。師長が「心配ないですよ。インスリン打つのは面倒くさいですが、普通の人生送れますよ」と説明して

このような1型糖尿病が2型と混同されてしまうことがあります。同じように血糖が上がる病気なのですが、全く別物です。できればインスリン欠損症とか、病名を変えたら良いと思うのですが、実現には至っていません。米国や北欧では1型の発症率が日本の30倍くらいあります。すると学校のクラスに1人くらいい

話がよく聞きます。進学や就職にも不利になることもあり、1型糖尿病を隠して就職試験を受けることもあります。そのような状況を打開したいと思うのですが、一般的に周知されていないのが実情です。私の前任施設、東京女子医科大学糖尿病センターは世界で一番多くの1型糖尿病患者さんを

されます。その中に栄養士と医療事務の方がいたので、当院にスカウトしました。2人とも妙齢の女性で明るい性格、10年以上勤務してもらっています。私も含めた他のスタッフは仕事でも飲み会、学会遠征中も2人が1型ということとをほとんど意識していません。よく食べるし、酒もよく飲むしデザートもいけ

いました。その後、師長は私に「一番説得力があるのはウチの2人の生活ぶりを見てもらうことですよね」と言ってきました。あはは、2人で大笑い、全く同感でした。読者の皆様におかれましては、もし身近に1型糖尿病の患者さんがいたら、特別視せず、普通に接して頂くことをお願いしたいです。